学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	山口　慶子【論文博士】 【人間発達科学専攻　平成２０年度生】 （平成２６年９月単位修得退学）
論 文 題 目	「母親になる」体験をとおした女性心理臨床家の職業的発達　―妊娠、出産、子育ての体験と臨床活動の交差―
審 査 委 員	（主査）　准教授　岩壁　茂
	教授　井原成男
	教授　篭　倫子
	教授　藤田　宗和
	准教授　上原　泉
インターネット公表	○　学位論文の全文公表の可否（　可　・　否　） ○　「否」の場合の理由 ア．当該論文に立体形状による表現を含む イ．著作権や個人情報に係る制約がある ウ．出版刊行されている、もしくは予定されている エ．学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ．特許の申請がある、もしくは予定されている ※　本学学位規則第２４条第４項に基づく学位論文全文のインターネット公表について

要　　旨

本論文は、妊娠、出産、子育て期にある女性心理臨床家の職業発達と個人としての成長体験を、グラウンデッドセオリーアプローチを用いて検討した。他者の成長に寄与する心理臨床家にとって、一個人として子育てを体験することは、臨床家としての機能や援助観に大きな影響をもつことが指摘されてきた。また、臨床家としてのアイデンティティや心理的適応に関する考え方は、母親としての体験を振り返り、統合するプロセスに影響をもっており、二つの領域の交差は、臨床家として職業的成長を捉える上で極めて重要である。本研究では、妊娠期、出産期、子育て早期、復職後の４期に女性臨床家にインタビューを行うことによって、彼らの個人そして心理臨床家としての主観的な成長感および変化を追っている。

その結果、妊娠期の女性臨床家は、自らの私生活の変化を妊娠という目に見える形で、いわば意に反して「自己開示」することになり、それまでの治療関係の持ち方や臨床的関わりの変化を余儀なくされたことが明らかになった。出産は身体的にも生活面でも大きな変化であり、臨床家としての自分と個人としての自分が重なり、自身を見直す変革期となった。子育て期に入り、復職すると自らの出産・子育て体験が、クライエントを理解するためのリソースとして機能しはじめ、より臨床家の個人に即した臨床スタイルが発展していくようになることが描き出された。妊娠から子育てに至るライフイベントは、これらの女性臨床家にとって極めて重要な成長の契機となっていることが示された。

審査委員会は、計４回行われた。まず、平成 26 年 7 月 9 日、9 月 17 日に審査会が開催されたが、申請者の満期退学により、再度審査委員会が 11 月に立ち上げられた。同年 11 月 19 日の審査委員会のあと、微少な修正を確認する審査を 12 月 24 日に行った。審査の過程で、質的方法手続の記述の具体性、負のケース分析の位置づけ、中心的概念の定義づけの仕方の問題が指摘され、修正加筆が要求された。それらに対して適切な修正がなされ、論文の完成度が高まった。公開審査会は、平成 27 年 2 月 12 日に行われ、的確なプレゼンテーションが行われ、質疑応答において適切な対応がとられたと判断された。

以上の結果から、本審査委員会は、本論文を人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻の学位、博士（人文科学）Ph.D. in Clinical Psychology に値するものとして、全会一致で合格とした。